

熊本地震災害派遣

1等空佐 辻

正紀 9空団

編集委 本稿は、航空自衛隊・辻1佐が『鵬友』（28年7月号）に投稿された論考である。鵬友発行編集長とご本人の了解を得て、転載する。なお『鵬友』は、空自の幹部学校幹部会が刊行している。

平成28年4月14日、午後9時30分頃、官舎で見ていたテレビに熊本県で大きな地震が発生したとのテロップが流れた。

「どのくらいの被害が発生しているのだろう」

被害の大きさを推測するため、最大震度についてスマホで調べていると、部隊の当直幹部からの電話が鳴った。

「熊本県で震度7の地震が発生した模様です。細部は確認できていません。新たな情報が入り次第報告します」

現地入り

私は、第9航空団の副司令として沖縄県的那覇基地で勤務していました。私は、震度の大きさから航空自衛隊も災害派遣を行うと予想しましたが、実

た。

私も4月26日から熊本市健軍にある西部方面総監部に設けられたJTF（統合任務部隊）指揮所で活動に参加することとなり、4月25日に那覇基地を出発して春日基地へ向かいました。

春日基地に着くと西部航空方面隊司令部から災害派遣に関する必要な情報を受け取り、翌日の朝4時、私は、航空自衛隊派遣幕僚の第2陣としてJTF司令部に派遣される約30名とともに、春日基地を出発して健軍駐屯地に向かいました。

私の役割は、JTF司令部に派遣された航空自衛隊の幕僚たちの先任者としてJTF指揮官を支えること、JTF司令部や航空自衛隊の各司令部と調整して現地の航空自衛隊の部隊が活動しやすい環境を整えること、でした。

私は、東日本大震災から約9カ月後の2011年12月、松島基地の飛行群司令として赴任した経験がありました。当時、松島基地をはじめ東北地方には震災の傷跡が大きく残っていました。この松島基地で見聞きした東日本大震災での自衛隊の活動について、頭の中でもう一度整理し直しながら、今回の災害派遣に臨みました。

「ここが今回の震災の現場か」九州自動車道を通って健軍駐屯地を

目指している途中、熊本インターチェンジを過ぎたあたりから、屋根に青いビニールシートをかけた家が見えるようになり、高速道路を降りる益城熊本空港インターチェンジ付近では、今までの以上に多くの屋根がビニールシートで覆われていました。

「健軍駐屯地に到着すると『災害派遣』と表示された車両が所狭しと並び、西部方面総監部の建物に入ると、陸、海、空自衛隊から集まった多くの幕僚が、それぞれの迷彩服を着てせわしく動き回っていました。私は、持ってきた2週間分の荷物を邪魔にならない場所へ置き、JTF指揮官を務めている西部方面総監や陸海の主要な幹部に会ってJTFの活動の実情を確認した後、航空自衛隊が活動している現場に向かいました。そして、そこで目にした光景は、想像以上に厳しいものでした。

指揮官の信頼感

「海上自衛官や航空自衛官が活躍している写真も表示しなさい」

JTF司令部では、毎朝、前日に撮影した写真を会議室のスクリーンに表示しながらJTF指揮官に活動状況を報告していました。その日はたまたま陸上自衛隊の活動を撮った写真だけが報告に使われていました。その報

告を受けたJTF指揮官が、幕僚に指導した一言でした。

「航空自衛隊の現地の指揮官も同席できるような調整しなさい」

丸川環境大臣が、5月3日に熊本市を訪問されるという予定がJTF司令部に届きました。その際、環境省の要請で瓦礫の撤去にあたった自衛隊に対し、丸川環境大臣がお礼を述べられる場が設けられることとなりました。

初めは、部隊の活動の予定などから航空自衛官はその場に同席しない予定でした。これはその報告を受けたときのJTF指揮官の指導です。

また、私は、現地に入る前、西部航空方面隊司令官から、これまでの部隊の活動状況や今後の見直しなどについて話を伺う機会がありました。その話の中で、JTF指揮官を務める西部方面総監やその幕僚、さらには佐世保総監に対する西部航空方面隊司令官の尊敬や信頼がにじみ出ていました。さらに、JTF司令部で幕僚活動をしているとJTF指揮官の航空総隊司令官や西部航空方面隊司令官に対する信頼感をその言動から十分に感じることができました。これらに加え、前述したような指導が、JTF指揮官から毎日のように行われていたのです。

このように陸、海、空自衛隊の垣根を越えた各指揮官の間の厚い信頼関係を肌で感じながら、活動していた部下指揮官や幕僚たちは、「いらぬことに気を遣う」必要がなかったため、持てる能力を任務の達成に集中させることができました。その結果、「任務を達成する」という共通の価値観の下で、率直な意見をぶつけ合いながら仕事をすることができたため、部下指揮官相互や幕僚相互の信頼関係も、次第に強固なものになっていきました。

統合が深化したとはいえ、陸、海、空自衛隊では、任務や活動範囲の違いなどから物事の捉え方や部隊の行動要領が異なっています。また、JTFでは普段とは違う組織で活動するため、部隊間や幕僚間の調整要領や意思疎通のやり方などの勝手がいつもとは違ってきました。これらの違いからJTFで活動する場合は、部隊間や幕僚間での調整や意思疎通に齟齬が生まれることがあります。しかし、この齟齬は、早期に着実に是正させていかなければ、最悪の場合、部隊間や幕僚間に軋轢が生じ、相互不信の原因となってしまうこともあります。この相互不信は、JTFの能力発揮を有形無形に阻害していくことは想像に難くありません。私は、東日本大震災のJTFでもこのような場面があったと聞いていました。しかし、今回の活動を通して各自衛隊の指揮官の互いに

対する信頼感が、軋轢や相互不信の発生を防止するためには、絶大な効果を発揮することを目の当たりにしました。

このような信頼感がどのようなふうにくまれるのか。それは時々、お互いが顔を合わせるだけでは生まれません。各指揮官の話の聞いていると、日頃から忌憚のない意見をぶつけ合い、真剣に議論して困難な仕事を進めていくことを繰り返しているからこそ、深い信頼感がはぐくまれているということを感じることができました。

心遣い

現地に向かうバスの中で航空自衛隊の派遣幕僚たちに強調したのは、現地部隊の隊員に対する心構えでした。東日本大震災では、疲労感からか現地部隊の隊員に対して心ない言葉を投げかける増強要員もいたと聞いていました。現地部隊の隊員は自らが被災者でもあります。自衛隊の仲間として現地部隊の隊員に対して心を尽くすのは当然のことであり、それができない、あるいは一時的にでも忘れてしまうと、自衛官以外の被災者に対しても失礼な言動をとってしまう可能性が高くなります。

一人でもこのようなことをしてしまふと、自衛隊の災害派遣活動に対する地元の信頼が得られなくなってしまう。私は、当初、その言葉の意味がわかりませんでした。なぜなら、航空自衛隊の部隊の規模は小さかったため、瓦礫の撤去に携わった区域は、陸上自衛隊の活動範囲に比べると極めて限定されていたからです。このため、「陸上自衛隊を助けた」という意識が私自身にはなかったのです。

しかし、その後の陸上自衛隊の部隊の指揮官や幕僚の言動から、「航空自衛隊と陸上自衛隊が同じ現場で一緒に活動している」ということが、部隊間の信頼感を増大させ「俺たちの部隊だけがきつい現場で活動している」という「孤立感」を生じさせなかった効果があったのではないかと推察できるようになりました。「部隊の孤独感」は、隊員の精神的疲労を増大させることは

想像に難くありません。この部隊の孤独感が活動に影響を与えた例について東日本大震災での災害派遣の経験者から何度か聞く機会がありました。

心構え

「この現場の状況は、航空総隊にすぐ報告しておかないといけない」「いや、まずは西部航空方面隊司令官の意図を確認した方がよい」

第2陣による幕僚活動が始まった頃、航空自衛隊の派遣幕僚の間で交わされた言葉です。その話を聞いていた私は、西部航空方面隊司令部と航空総隊司令部に電話をかけて調整を始め、その結果を現地で活動している航空自衛隊の部隊指揮官に連絡しました。話を聞いていた現地の指揮官は、「わかりました。JTFとしてその方向で進むのですね」と確認してきました。その言葉を聞いて、私はとっさに「また後で、連絡します」と反応し、JTFの幕僚が集まる部屋に入って行きました。

そうです。わたしはこの時、JTF指揮官の幕僚であることをしっかりと自覚せず、航空自衛隊の幕僚の感覚で調整を進めていたのです。日頃、航空自衛隊の指揮官や幕僚として活動しているため、JTF指揮官の幕僚であることを強く意識して活動しなければ

ば、このような失敗を犯してしまいます。また、多くの部隊が関係すれば、さまざまな思想があり、それぞれの上級司令部の考えもあります。このような時ほど、「われわれはJTF指揮官の幕僚だ」という自覚を強く持たなければ、自分の立場を逸脱した仕事をしてしまい、JTFの活動を阻害してしまうことになってしまいます。

それからは、この失敗談とともに「われわれはJTF指揮官のために活動している」、「現地の部隊は、JTF指揮官の指揮で活動している」ということを何度も繰り返し幕僚たちに言い続け、幕僚たちにJTFの幕僚としての自覚を促すとともに自分自身の戒めにしていました。

災害派遣でのJTFは、司令部の幕僚、現地で活動する部隊とも各地から「寄せ集めたメンバー」で構成される場合がほとんどです。また、任務は決められているものの、普段の業務とは違い、活動の内容や要領が細部まで規則で決められていたり、手順化されてはいません。状況も刻一刻と変化していきます。こういう時は活動に携わる一人一人の知識や判断力、さらには調整力あるいは人間性が、司令部や部隊の能力発揮に普段以上に影響を及ぼします。加えて、司令部や部隊の能力は、個人の能力だけでなく人間関係や

信頼関係にも大きな影響を受ける場面があったことも東日本大震災時に現地で活動していた隊員から聞いていました。

災害派遣を含め、自衛隊の活動する場面が厳しい状況であればあるほど、JTFとして活動する可能性が高くなります。JTFで能力を発揮して任務遂行に寄与するためには、日頃の業務に前向きに全力で取り組んでいき、自分の実力を十分に養っておく必要があります。

また、災害派遣ではどの部隊が最後まで残って活動を終息させていくのかを考え、その部隊が円滑に活動できるように配慮して行動しなければなりません。今回の場合でいえば、陸上自衛隊が最後まで熊本で災害派遣活動を実施することは明白でした。このため、陸上自衛隊が実施しようとしていることに対して陸上自衛隊の部隊より前のめりになって活動したり、先走った活動をすることは、後に残る陸上自衛隊の活動により影響を及ぼすはずはありません。JTFの幕僚はこの「誰が最後まで災害派遣活動を行うのか」ということを強く意識して幕僚活動を行う必要があります。

先任の役割

私は、時間を見つけては西部方面総監の最先任上級曹長の部屋に話を聞きに行きました。これは、現地で活動する隊員のリアルな声をできるだけ多く聞くことにより、災害派遣活動の実情をリアルタイムでつかみ、その変化を幕僚活動に生かしていこうと考えていたのです。最先任上級曹長の意見は常に的を射っており、航空自衛隊の活動にとつても参考になるものばかりでした。

また、あるとき航空自衛隊の現地部隊に、新しい指揮官とともに准曹士先任がやってきました。それまで准曹士先任は、現地部隊に配置されていませんでした。翌日、明らかにそれまでの部隊の雰囲気とは大きく変わっていました。隊員の言動に、無駄のない「しまり」を感じられるものになっていました。指揮官もその准曹士先任に全幅の信頼を置いている様子でした。

活動の現場に派遣される部隊には、指揮官とともにその准曹士先任も同行させることが、部隊の行動を律する上で極めて有効な手法であることを実感した場面でした。

おわりに

今回の災害派遣では「ブッシュ型」「プル型」「セルモーターの役割」など、災害派遣の「段階」を明確に整理して活動を行うことにより自治体との連携や活動要領の統制を円滑に実施するこ

とができました。これを可能にした要因は、災害の発生した地域は日頃から陸上自衛隊のみが活動している地域であつたため、自治体との連携や災害派遣の活動要領などは、陸上自衛隊が主体となつていたことが明白だつたことが大きいと思われまます。

翻つて、航空自衛隊の基地あるいは海上自衛隊の港がある地域で大きな震災が発生した際は、自治体との連携や災害派遣の活動要領に関して各自衛隊の日頃の活動を考慮して調和させていかなければなりません。このような環境でJTFの災害活動を円滑に行つていくためには、各自衛隊の指揮官や幕僚が、災害派遣に関し日頃から忌憚のない意見をぶつけ合い、議論した上で計画を作成し、訓練を反復して行くしか方法はありません。

今回の災害派遣では、この日頃の努力こそが、自衛隊の災害派遣を地元の人々の命を救い、また、勇気を与える活動に結び付ける唯一有効な方法であることを確信することができました。

筆者・防大29期、飛集団付、8空団、5空団、幹校付、防大、空幕、教育集団、13教団、中空、空幕教育課飛教班長、4空団飛行群司令、幹校主任教官、現在、9空団副司令